少年少女愛の小説選

小さな町の中で

須田　稔

葉之日本社

NDC 913
少年少女愛の小説選
小さな町の中で
那須田　稔著
実業之日本社
1971年

本文10ポ活字使用　184ページ　20.5cm
小学校上級〜中学生むき

検印省略

小さな町の中で
1971年7月25日　初版発行

著　者　那須田　稔
発行者　増田義彦
発行所　株式会社 **実業之日本社**
東京都中央区銀座1-3-9（〒104）
TEL（562）4311　振替　東京 326
印刷所　株式会社 東京研文社

© M. Nasuda 1971. Printed in Japan

8093—804021—3214

はじめに

現代は、不安の時代といわれています。そしてこれは、そのような時代に息づく魂の記録だといえましょう。でも、どうか、深刻な物語だというふうに考えないでください。この物語は、海べの町を舞台に少年少女がくりひろげるファンタジックな愛の心理劇なのですから。

那須田　稔

●もくじ

海べの町の風物詩
とびたつもの——6
青眼先生——16
写真のなかの少年——30
かさ人形——39
黒い魂
空想の時間——54
育子のささやき——72
行方不明の詩人——83
夢のなかの夢——90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

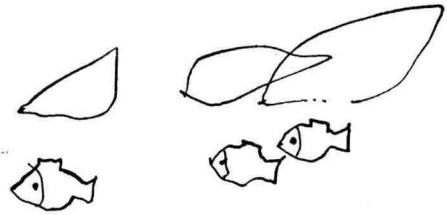
■この本の絵をかいた人

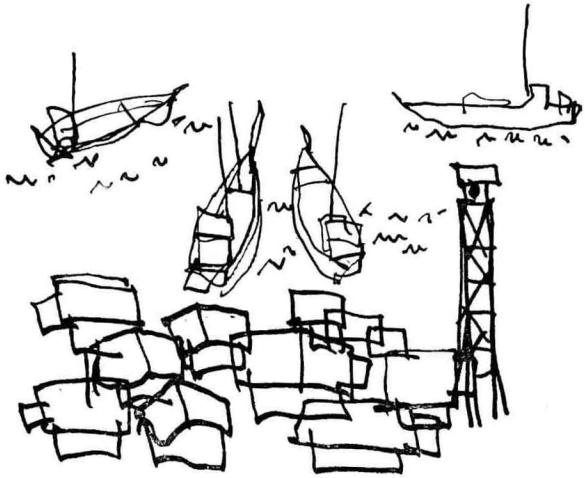
生沢朗（いくざわ　ろう）

一九〇六年、兵庫県生まれ。日本美校で油絵を学ぶ。さし絵では井上靖とのコンビで知られる。画集『氷壁』などがある。

海べの町の風物詩

とびたつもの…… 6
青眼先生……16
写真のなかの少年……30
かさ人形……39





とびたつもの

朝から空はいちめんの雨雲におおわれていた。丘の上にはもうだいぶまえから雨雲がひくくたれさがっていて、いまにも一雨きそうな気配だが、それでいてなかなか雨にならない。こういうどんよりとくもった日にはよくあるように、ひっそりとしてたいくつだった。

たいくつといえば、きょうの海がそうだった。この丘の上からは、江の島のうかぶ湘南の海が南のほうに見える。

晴れた日には、海は青い鏡のように光り、白い帆のヨットがせわしく動きまわる。だがいまは鉛色に沈み、みょうにおちつきはらっている。

視線を西へうつすと、小山から谷へ紅葉が色あせた緑のあいだにひろがっていて、そこだけがわずかばかりはなやいでいる。しかしそれも谷からとつぜんがけをきって雛段がたに造成された住宅地の、とりすました風景にさえぎられてしまう。

住宅地の西のすみには、小さな公園ができていて、犬をつれた中年すぎの女の人たちが、なにを話しているのか芝生の上をいったりきたりしながら、山のむこうの海をながめておしゃべりにむちゅうだ。こんなところにくるんじゃなかったと、大園裕子はゆううつだっ

た。

来週の日曜日までに、裕子は写真をとらなければならなかった。テーマは『わたしたちの町』。

裕子の中学の写真部が、毎年十一月三日にひらく校内作品展へ出品するためだ。それで丘にのぼり新しくできた住宅地へいけば、変化のある小さな町の写真がとれるかもしれないと思ってやってきたのだった。

この丘には小学校のころいちど遠足にきたことがあった。そのころ山をきりくずして造成した住宅地などはなかった。こんもりとしたかわいい山が幾重にも波のようにかさなり、裕子たちの住む海岸の町へとつづいていた。

その山がつぶらな感じなので、このあたりいったいを津村とよんでいるのだと父が教えてくれたことを記憶している。

その父が、「西の丘にしゃれた住宅地ができたよ。」というものだから、土曜日の放課後、のこのこきてみたけれども、まったくの期待はずれ。

海を見おろす斜面にひろがる住宅地のおぎょうぎのよさといったら！

八メートルのメインストリートが住宅地の中央に走り、歩道にそって街灯と街路樹がならんでいるのはまあいいとしても、がまんならないのは数百軒もある家と庭が、ほとんど

おなじかたちにおなじひろさでくぎられていることだった。

商店も病院も郵便局もあり、たしかに父のいうとおりかわいい住宅地にはちがいないけれど、わたしはこんなおぎょうぎのいい箱庭みたいな町はきらいだと、裕子は思う。

町というのは、おもちゃばこをひっくりかえしたようなめちゃめちゃな活気がなくては。ところで、裕子がカメラに興味を持ったのは、中学の進学記念に、父の古いカメラをゆずってもらったのがきっかけだった。写真をとることがたのしくて、やたらにパチパチととりまくった。

それでも、どんなものでもカメラをむけるというのではなかった。知らず知らずのうちに、花や木などの静物よりも、動いているものに裕子はひかれた。

いままでとったもののなかで気にいっている写真は、いつか父と母といっしょに信州の戸隠へスキーにでかけたときのものだ。銀色に光る雪山を背景に、シラカバ林のなかで大きなしりもちをついている母と、母をめがけて滑降していく父、そのあいだにカメラをかまえた裕子の影がのびている――『ある日の父と母』と題したこの作品には、父と母のわかやいだ表情が生きていると、田代先生がほめてくれた。そういわれてみれば、この父と母は、どことなく真剣で、そして、こっけいだった。こんなふたりのすがたはめったに裕子の目にうつらない。いや、うつらないというより見おとしている一瞬の父と母のすがた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

なのだ。

「だから、写真のいいところは、ふつうでは見えない〝いま〟のすがたを気づかせてくれることだろうね。」

写真部の顧問をしている田代先生は、そういったけれど、むつかしいりくつじゃなしに、裕子には、カメラをかまえシャッターをおろすときの緊張感がこころよいのである。それには、静かにしているものよりも、はげしく動いているものにカメラをむけたときのほうが、より裕子の緊張感をそそる。

「そんなに写真がすきなら、将来、写真家にでもなったらいいわ。」

と、友だちの増田育子にしょっちゅうからかわれるが、べつに裕子はそんなふうには思っていない。

写真部の人たちったら、へんに気どって専門家ぶっている。高校や大学の写真愛好グループと会合をひらいたり、作品の研究会をしているが、裕子はいちども参加したことはなかった。

もともと、写真部にはいったのも、フィルムが安く手にはいるというそれだけのことだった。ただ、裕子は、じぶんの気にいった写真がとれればそれでよかった。

『わたしたちの町』という作品展のテーマをだされたとき、できるだけ新鮮な写真をとってみようと、あちこちの町のなかを歩きまわってみたものの、これはと思われる材料にぶつからなかった。テーマが平凡なだけにかえってむつかしい。

父にすすめられてきたこの住宅地も、新味がなかった。犬をつれたおくさんたちは、まださっきの公園のところでおしゃべりに花をさかせている。

いつまでもこんなところにいてもしかたがない。裕子はカメラをぶらさげて、住宅地と反対がわの丘の林のなかをおりていった。ここだけは、まだ造成されずに、むかしの自然をのこしていた。

空は灰色の雲に満ち、小鳥たちがかん高い声で鳴いていた。その小鳥たちの鳴き声をききながら雑木林を歩いていくと、黄ばんだ葉が風にふかれてまいおちてきた。

裕子は落葉をふんで歩いた。

とつぜん、ひとすじの光がさしてきた。

西風がでてきて、雲の部分をふきよせ、さけめをつくったのだ。

空のさけめをかこむ雲のへりが動くにつれて、スポットライトのような光があちこちにむけられた。そこには長いむきだしの色あせたつる草のもつれがあった。つる草のなかになにかが動いている。

裕子は、ほとんど無意識のうちに、空のさけめからのびてくる光と、光がてらしだしたつる草にむけてカメラをかまえた。つぎの瞬間、羽音をたててつる草のあいだをくぐりぬけてとびたつものがあった。裕子は、むちゅうでシャッターをおしていた。

空をあおぐと、木の葉のあいだをすりぬけて、日の光がまいおりているだけだった。

カメラをケースにしまい、また、カニのよこばいのようなかっこうでおりていくと、すぐま下に小さな沼があった。

灰色の雲に満ちていた空が、ほんのすこし変化しただけで、あたりがふいに生き生きと呼吸しはじめたように裕子には感じられた。

沼は、雑木林にかこまれているわりには、ほの明るくしんとしている。カッパでも、にゅうっと顔をのぞかせて、「やあ。」といえばおもしろいのに。

裕子は、そんなことを空想してくすくすとわらった。それから、そんなとっぴょうしもないことを空想している自分の幼稚さにあきれたりしていた。

光は、すこしずつ消えていき、またもとのうす暗い風景にもどった。

風がでてきて雑木林をざわめかしはじめた。上のほうから小石ががさがさころがり、裕子の足もとをかすめて沼にしずんでいった。小さな水しぶきがあがった。

そのとき、なにかの物音がうしろのほうでしたようだった。

ふりかえって見たけれど、林のなかにはだれもいなかった。しばらくすると、こんどは口ぶえがきこえたようだった。

裕子は茶色のコートのえりをたてて沼をはなれ、林の道を歩いていった。

とちゅう、こわれかけの小さな家があった。丸太を組みあわせてこしらえた、一間だけの山小屋のような家だった。さわれば、たちまちばらばらとくずれてしまいそうな、だれも住んでいない廃屋であった。なんとなく無気味だったので、いそぎ足でとおりすぎた。

また、口ぶえが鳴った。

だれかに後をつけられているような感じがして、おちつかなかった。それでわざとゆっくり歩いたり、きゅうにはやく歩いたり、ときどき、スキップをまじえたり、そして、たちどまって耳をすました。しかしきこえるのは、風が空をかけめぐる音だけだった。

夕食のとき、住宅地の見える丘の裏がわで見つけた沼のことを父に話すと、母が、
「猫池のことじゃないかしら。」
と、ひとりごとのようにいった。すると、そのそばから父が、
「まだ、猫池がのこっていたのか。もうとっくにうめたてられたかと思っていた。」
と、なつかしそうな顔をした。
あの沼は猫池というのだそうだ。父と母がまだ結婚してまもないころ、沼のそばの林のなかのくぼ地を地主からかりて、小屋をたてて住んだものだという。
「いまはどんなふうになっているか知らないが、あのころはいいところだった。小鳥たちがさえずり、猫池ではふなやどじょうがつれたりしておもしろかったよ。」
と、父がいった。
父と母があの沼のある谷に住んでいたなんて初耳だった。それに、あの雑木林を、〝青春の谷〟と、ふたりはよんでいたのだそうである。
「ふうん、それから。」
と、裕子は話のつづきをさいそくした。
「それからおまえが生まれたのさ。」
「ふうん。」

「おまえが三つのときだった。沼につきでているさくらの木であそんでいて、沼におちたことがあった。わたしはしごとで家にいなかったし、おかあさんはせんたくしていた。おかあさんが気がつくのがおそかったら、裕子はたすからなかったかもしれない。」

母があいづちをうって、

「そうそう。せんたくものをほそうと思って、ふっと見ると、裕ちゃん、沼の中でばちゃばちゃうかんだりしずんだりしているんだもの。おかあさん、びっくりしちゃった。いま思いだしても身ぶるいだわ。さくらの木につかまり、必死で裕ちゃんの髪をつかんでたぐりよせたものだよ。」

母の話では、しこたま水をのみこんで、おなかがゴムマリのようにふくれあがったそうである。

そんなことがあってからまもなく、いまくらしている電車通りうらのアパートに、ひっこしてきたのだという。

沼の事件のことも、そのころ住んだ家のことも、なにひとつ記憶していないと話すと、

「沼のそばに小さな丸木小屋が立っていなかったかい。まだ、そのままになっているはずだが。」

と、父がいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com